

# 学力の地域格差

志水 宏吉 (大阪大学大学院・教授)

## 要約

- ◇「大都市圏」の子どもたちのほうが、「市部」「町村部」の子どもたちより平均正答率が高い。
- ◇「基礎問題」「活用問題」ともにその傾向が認められる。
- ◇階層別にみると、「母親の学歴」の違いによる正答率の差が最も顕著である。
- ◇「教育費」の違いが、最も地域による格差が大きい項目である。
- ◇子どもを取り巻く教育環境の地域差はみられるが、意識項目についての差はほとんどみられない。

## 1. はじめに

### 1) 課題の設定

今から50年ほど前に、全国学力テストが行われていた時期、最も大きな問題と目されていたのが、学力の「地域格差」の問題であった。データを示すのが、手っとり早いだろう。

例えば、昭和36年(1961年)に実施された『全国小学校学力調査』によると、小学校高学年の算数について、最も平均点の高い「住宅市街地域」(41.7点)と最も低い「へき地」(25.3点)との間には、大きな格差が存在していた。国語についても、同様である(「住宅市街地域」57.6点、「へき地」41.7点)。学力の都鄙格差をいかに縮小するか。これが当時の文部行政の大きな課題の1つであり、また教育研究者が関心を寄せた問題でもあった(例えば、黒田孝郎「学力の格差と教育的環境」『教育学研究』第29巻、第2号、1962年)。

一方、43年ぶりに、2007年に実施された全国学力テストの結果をみると、そのような地

域格差は目立たなくなっていることがわかる。すなわち、算数A(基礎問題)の結果で言うと、「大都市」の平均正答率が82.6%なのに対して、「へき地」のそれは80.0%とほとんど遜色のないものとなっている。算数B(活用問題)、あるいは国語A・Bの結果でも、そんなに格差は目立たない。地域カテゴリーや問題の性質は同じではないので、比較には慎重であらねばならないが、地域類型ごとの「学力格差」は、以前と比べるとかなり小さくなっていることと考えると間違いはないだろう。

この変化は、ここ半世紀ほどの間に生じた日本社会の構造変動を反映したものだと思う。かつてに比べると、子どもたちが生まれ育つ社会環境の絶対的格差は、大きく縮小されたのではないか。今日、全国のどこに行ってもコンビニエンス・ストアをみつけることができるし、国土のすみずみにまでインターネット網がはりめぐらされている。

とはいうものの、学力の地域格差がすべて

消失したと言い切るのは、まだ早いだろう。2008年という時点で、どのような学力の地域格差が残っているのかを実際に把握してみようというのが、本章のねらいである。

最近では、耳塚がこの点にかかわる研究成果を報告している（耳塚寛明「小学校学力格差に挑む」『教育社会学研究』第80集、2007年）。そこで指摘されているのは、地域によって異なる学力の規定要因が見出されたという事実である。大都市圏では家庭背景が学力の分布を説明するうえで大きな役割を果たすのに対して、地方都市においては必ずしもそうとは言えないという知見が見出されたのである。

本章では、そのような関心を共有しつつ、私たちのデータに検討を加えてみたい。以下、次のような手順で、学力の地域格差という課題にアプローチする。

まず、学力テストの結果を地域類型別に概

観し、その実態を把握する。第二に、地域格差を生じさせる要因を検討するために、学力テストの結果をいくつかの階層指標別に見てみる。さらに第三に、保護者・児童対象のアンケート調査の結果から、学力の地域格差に関連すると思われる要因の析出を試みる。

## 2) 本調査における「地域類型」について

具体的な結果の提示を行う前に、本章で言うところの「地域類型」について説明をしておきたい。今回のデータは、全国の7県にわたる、小学校5年生2,500名あまりのデータである。当初予定していたよりも調査規模がかなり小さくなり、期待していたようなサンプリングをすることができなかった。次善の策として、協力してもらった対象校を、その所在地をもとに、以下のような3つの「地域類型」に整理した。

「大都市圏」… 政令指定都市およびそれへの通勤通学圏内である市

本調査で該当するのは、関東地方、東北地方、九州地方の4市（10小学校）

「市部」…… 大都市圏以外の市

本調査で該当するのは、東北地方、中部地方、北陸地方の7市（17小学校）

「町村部」…… 町村（最近合併した市町村は、旧市町村名で分類した）

本調査で該当するのは、東北地方、中部地方、北陸地方の6市町（15小学校）

## ■ 2. 学力の地域格差の実態

### 1) 基礎集計から

まずは、地域類型別での、国語と算数の各設問への正答率をみてみることにしよう。

表1-1は、国語の正答率を示したものである。

まず、全体の平均正答数が10.9問となっているのに対して、大都市圏の数が11.6問と突出してよい数値となっている。それとは対照的に、市部は10.5問、町村部は10.6問と、

全体の平均正答数を下回っている。国語については、大都市圏の子どもたちが、他の地域の子どもたちをかなり上回る結果を出しているとみてよいだろう。

設問ごとに見ても、大都市圏の優位は動かず、語句の意味・使い方（**1**（一）（1））と熟語の書き取り1問（**1**（三）①）を除くすべての設問で、最大の通過率を示している。他方、市部と町村部を比べると、設問による違いは多少あるが、ほぼ似通った正答率の水準となっていることがわかる。

表1-1 国語の正答率（地域類型別）

				(%)			
質問項目				全体	大都市圏	市部	町村部
サンプル数（人）				2,502	893	883	726
<b>1</b> (基礎)	(一)	(1)	語句の意味・使い方	85.9	87.6	81.8	88.8
		(2)	細部の読み取り1	67.1	70.7	63.6	67.1
		(3)	心情の変化の読み取り1	74.2	76.3	73.0	73.0
		(4)	心情の変化の読み取り2	79.0	84.0	76.7	75.8
	(二)	(5)	細部の読み取り2	69.1	71.8	69.1	65.8
		①	漢字の書き取り1	72.9	75.9	70.3	72.3
	(三)	②	漢字の書き取り2	70.1	71.7	70.0	68.5
		①	熟語の書き取り1	83.7	84.5	81.1	85.8
	②	熟語の書き取り2	50.9	58.8	45.1	48.3	
<b>2</b> (活用)	(1)		表現の効果の読み取り	49.0	53.4	48.0	44.9
	(2)	理由	内容理解1	67.9	72.2	65.8	65.0
		最もよく分かる部分	内容理解2	24.6	28.1	24.0	21.1
	(3)	①	内容理解3	25.9	33.1	21.1	22.7
		②	内容理解4	24.7	31.8	19.5	22.3
	(4)		内容理解5	0.5	0.6	0.5	0.4
(5)		内容理解6	69.5	72.8	68.2	67.1	
<b>3</b> (活用)	(1)	①	資料の読み取り1	86.5	90.1	83.5	85.8
		②	資料の読み取り2	79.0	81.7	76.4	78.7
	(2)		3つの資料の読み取り、説明	9.7	11.9	8.3	8.8
平均正答数（19問中）※準正答を除く				10.9問	11.6問	10.5問	10.6問

続く表1-2は、算数の正答率を示したものである。

全体の平均正答数が10.2問なのに対して、ここでも大都市圏の数値が10.6問と最も高い値となっている。続いて、町村部が全体の平均と同じ10.2問。最も低いのが市部で、9.7問となっており、国語とは対照的に、町村部と市部の間に若干の格差が生じていることがわかる。

設問別にみても、多くの設問で大都市圏の数値が最もよくなっている。さらに、同じく

多くの設問で、町村部の数値が市部のそれを上回るという結果となっている。合わせると、算数においては、大都市圏>町村部>市部という明確な序列が正答率にみられるという結果となったのである。なぜ国語にはみられなかった「町村部」と「市部」の格差が算数でみられるのかという問題は、今後さらに追求していかなければならない問いであろう。

表1-2 算数の正答率（地域類型別）

				(%)			
質問項目				全体	大都市圏	市部	町村部
サンプル数(人)				2,507	895	885	727
① (基礎)	(1)	①	小数の加法	77.1	80.1	75.4	75.5
		②	小数の減法	70.4	72.8	67.8	70.7
		③	小数の乗法	77.5	80.2	74.7	77.4
	(2)	左1	複合図形の求積と式1	79.8	82.5	77.3	79.6
		左2	複合図形の求積と式2	73.3	76.4	68.5	75.4
		左3	複合図形の求積と式3	74.6	78.4	71.1	74.0
		左4	複合図形の求積と式4	79.5	83.9	75.6	78.8
	(3)		整数の除法に関わる変数	58.9	64.1	55.3	56.9
	(4)	①上	依存関係にある2つの数量1	85.5	86.6	84.3	85.6
		①下	依存関係にある2つの数量2	86.7	88.5	85.5	86.0
②		依存関係にある2つの数量のきまりの発見	54.3	53.6	56.7	52.3	
② (活用)	(1)	表1	グラフの名称1	54.0	55.9	48.1	58.7
		表2	グラフの名称2	47.5	46.3	43.6	53.9
	(2)	表1	グラフの選択理由の説明1	16.0	20.3	11.8	15.7
		表2	グラフの選択理由の説明2	14.0	14.1	13.1	15.1
③ (活用)	(1)		情報の取り出しと面積の計算	11.9	13.5	10.6	11.4
	(2)	(ア)	与えられた条件に合致する数の組み合わせ1	42.9	45.0	39.8	44.0
		(イ)	与えられた条件に合致する数の組み合わせ2	13.6	17.4	10.6	12.4
平均正答数(18問中) ※準正答を除く				10.2問	10.6問	9.7問	10.2問

## 2) 基礎問題と活用問題

表1-3は、国語と算数の正答数を、「基礎問題」(各教科の大問の①)と「活用問題」(同②と③)とに分けて集計してみたものである(表中の数値は、平均の正答数を示している)。

まず国語をみると、基礎問題と活用問題の両方で、大都市圏の平均正答数が他地域よりもかなり高くなっていることがわかる。特に活用問題での格差が大きい(大都市圏の4.8問に対して、市部は4.2問、町村部は4.1問)ことが印象的である。なお、先ほどと同様であるが、市部と町村部の数値の間にはさしたる違いはみられない。

他方算数では、町村部の健闘が目立ってい

る。基礎問題では大都市圏>町村部>市部という序列が明確であるが、活用問題になると、町村部の2.1問という正答数は、大都市圏と肩を並べるものとなっているのである。なぜ町村部において、算数の活用問題の結果が大都市圏と比肩できるようなものになっているのか。にわかにその原因を推測することはできないが、きわめて興味深い結果ではある。

まとめると、基礎問題については、国語と算数の両教科で、大都市圏>町村部>市部という傾向がみられた。それに対して活用問題では、町村部の子どもたちは、国語がやや苦手であるが、算数はかなり得意である、というおもしろい知見が見出された。

表1-3 問題別の平均正答数(地域類型別)

	国語			算数		
	合計	基礎問題	活用問題	合計	基礎問題	活用問題
大都市圏	11.6 (3.1)	6.8 (1.8)	4.8 (1.9)	10.6 (3.5)	8.5 (2.4)	2.1 (1.6)
市部	10.5 (3.2)	6.3 (2.0)	4.2 (1.8)	9.7 (3.6)	7.9 (2.7)	1.8 (1.6)
町村部	10.6 (3.1)	6.5 (1.8)	4.1 (1.8)	10.2 (3.5)	8.1 (2.5)	2.1 (1.6)
全体	10.9 (3.2)	6.5 (1.9)	4.4 (1.9)	10.2 (3.5)	8.2 (2.6)	2.0 (1.6)

注) ( ) 内は標準偏差。

### 3. 階層的観点からみた学力の地域格差

#### 1) 階層の地域差

今回の調査の保護者対象アンケートでは、

通常のこの種のアンケートでは設定しにくい、家庭の「階層的地位」をたずねる設問をいくつか設けた。その中から、ここでは5つの指標を設定して、学力との関連を考えてみたい。その5つとは以下である。

<階層指標>	<カテゴリー>	<調査票の選択肢>
「母親の職業」	「フルタイム」	← 「フルタイム雇用」「自営業・家業手伝い」
	「パートタイム」	← 「パート・アルバイト、臨時雇い労働」「自宅での塾・外国語教室・添削業務など」
	「専業主婦」	← 「以前は働いていたが、現在は働いていない」「今までに収入を伴う仕事をしたことがない」
「父親の職業」	「技能」	← 「技能職・労務の職業」「運輸の職業」「農林漁業の職業」「保安・サービスの職業」
	「事務・販売」	← 「販売の職業」「事務的職業」
	「専門・管理」	← 「管理的職業」「専門・技術的職業」
「収入階層」	「500万円未満」	← 「200万円未満」「200万円以上～300万円未満」「300万円以上～400万円未満」「400万円以上～500万円未満」
	「500万円以上800万円未満」	← 「500万円以上～600万円未満」「600万円以上～700万円未満」「700万円以上～800万円未満」
	「800万円以上」	← 「800万円以上～900万円未満」「900万円以上～1,000万円未満」「1,000万円以上～1,200万円未満」「1,200万円以上～1,500万円未満」「1,500万円以上」
「母親の学歴」	「高卒」	← 「小学校・中学校」「高等学校」
	「短大・専門学校卒」	← 「専門・各種学校」「短期大学・高等専門学校」
	「大卒」	← 「大学」「大学院」
「父親の学歴」	「高卒」	← 「小学校・中学校」「高等学校」
	「短大・専門学校卒」	← 「専門・各種学校」「短期大学・高等専門学校」
	「大卒」	← 「大学」「大学院」

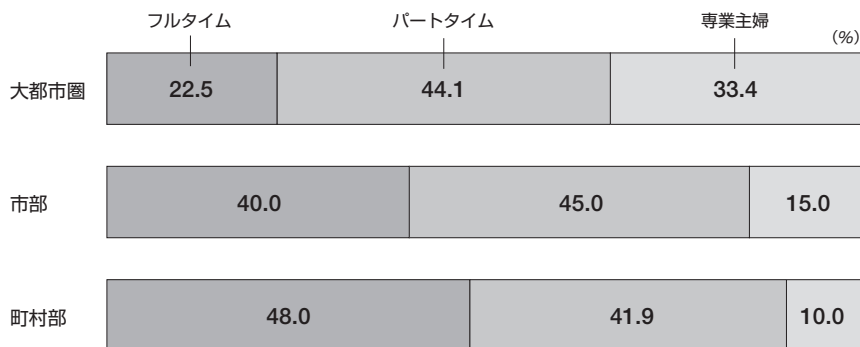
これらの階層指標で示された家族が、地域類型別にそれぞれどのぐらいの割合で存在するかを図示したものが、**図1-1**から**図1-5**である。

5つのグラフを見ると、明らかに地域によって各階層が不均等に存在していることがわかる。特に、5つの指標すべてについて、大都市圏と市部・町村部の間に大きな違いがあることが見てとれる。とりわけ顕著なのが、**図1-5**の「父親の学歴」、および**図1-2**の「父親の職業」に見られる格差である。

どの指標をとっても、市部と町村部との間

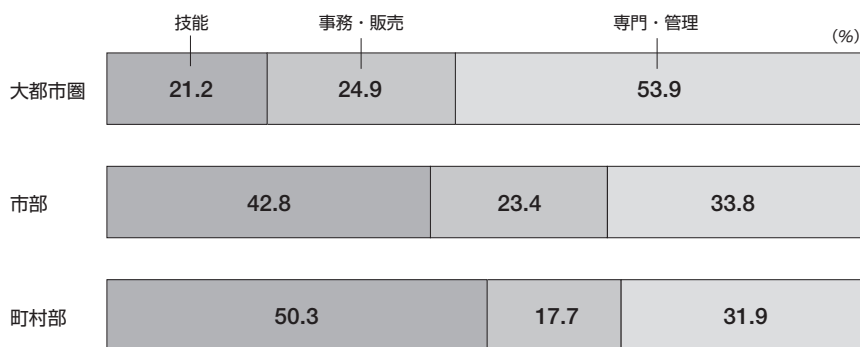
にはほとんど差がなく、わずかばかり市部のほうが高階層であると言えるのみであるのに対して、大都市圏の数値は突出している。すなわち、「専業主婦」の比率は33.4%と市部・町村部の2～3倍に達し(**図1-1**)、また「800万円以上」の高収入家庭の比率(42.2%、**図1-3**)や母親が「大卒」の比率(20.5%、**図1-4**)は他グループの約2倍にのぼっている。そして、父親が「専門・管理」職に就いている比率(**図1-2**)や「大卒」である比率(**図1-5**)はゆうに50%を超え、他グループの追従を許さない結果となっているのである。

図 1 - 1 母親の職業（地域類型別）



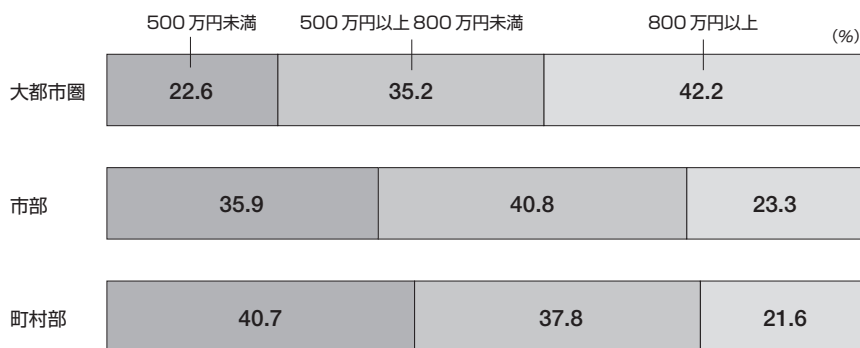
注) サンプル数は、大都市圏814名、市部833名、町村部689名。「いずれもあてはまらない」および無回答・不明は省略した。

図 1 - 2 父親の職業（地域類型別）



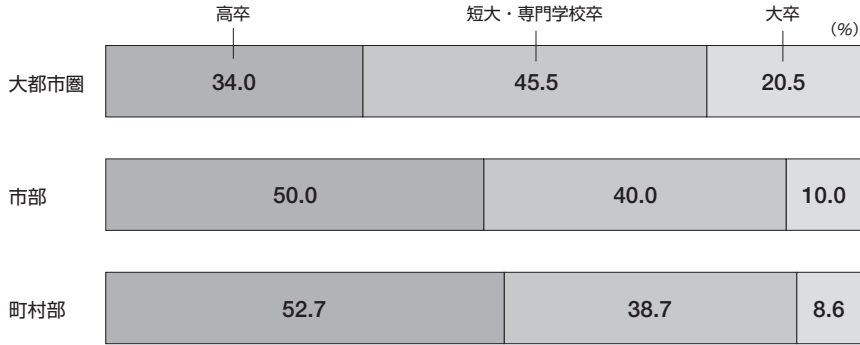
注) サンプル数は、大都市圏751名、市部710名、町村部598名。「その他」および無回答・不明は省略した。

図 1 - 3 収入階層（地域類型別）



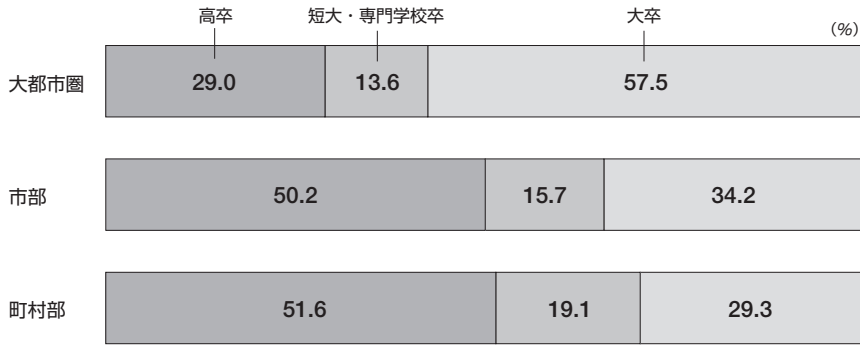
注) サンプル数は、大都市圏792名、市部757名、町村部654名。無回答・不明は省略した。

図 1 - 4 母親の学歴（地域類型別）



注) サンプル数は、大都市圏879名、市部852名、町村部708名。「その他」および無回答・不明は省略した。

図 1 - 5 父親の学歴（地域類型別）



注) サンプル数は、大都市圏832名、市部773名、町村部661名。「その他」および無回答・不明は省略した。



## 2) 階層と学力との関係を地域類型別にみる

前項のグラフに示されているように、地域による階層差は、大都市圏と市部・町村部との間にクリアに観察できる。そうした違いは、学力格差の問題とどのように関連しているのであろうか。その問題を考える1つのステップとして、同じ階層カテゴリーに属する子どもたちの学力が、地域類型によってどのように異なるかを見てみることにした。その結果が、次の表1-4である。

表の数値は、国語と算数の問題に対する正答数を合わせて正答率を算出したものである。例えば、国語で19問中12問、算数で18問中14問正解した子どもの数値は、合計で37問中26問正答だったということになり、70.3% ( $26 \div 37 \times 100$ ) となる。一番上の段をみていただきたい。母親の職業が「フルタイム」である子どもたちの平均正答率は、大都市圏が59.9%、市部が54.8%、町村部が57.5%となっている。つまり、同じ「フルタイム」の仕事をもつ母親の子どもであっても、大都市圏の子どもたちの結果は市部の子どもたちのそれよりも5ポイントほど良好なものになっている、という結果が出ているのである。

表をじっくり眺めてみると、以下のような特徴が浮かび上がってくる。

①まず、全体の数値を見ると、5つの階層指標すべてで、下の段に行くほど正答率が高くなっていることがわかる。すなわち、「専業主婦」のお母さん、「専門・管理」職

のお父さんを持つほど、また高収入になればなるほど、そして父母の学歴が高くなればなるほど、子どもの正答率は高くなる。

②同じカテゴリーに属する子どもたちをとってみると、上で「フルタイム」について見たのと同様に、大都市圏の子どもの方が他地域の子どもよりも正答率が高くなる傾向にあることがわかる。また、市部と町村部を比較すると、後者に居住する子どもたちの正答率のほうが若干だが高くなる傾向が見られる。

③とはいうものの、カテゴリーによっては、②の傾向とは異なる結果が出ている。例えば、父親の職業が「技能」職あるいは「事務・販売」職の子どもたちをとってみると、町村部の結果は大都市圏の結果と甲乙つけがたいものとなっている。町村部でそれらの職種に就いている層はかなり安定した家庭生活を送っているからではないかと推測される。

いずれにしても、表1-4からうかがえる最大の知見は、同じ階層カテゴリーに属する子どもたちでも、大都市圏の子が最も「強い」という点であろう。学力を伸ばすことを考えた場合、大都市圏の社会環境が有利に作用する場合が多いとすることができるのではないだろうか。

表 1-4 階層別に見た平均正答率（地域類型別）

		(%)			
		大都市圏	市部	町村部	全体
母親の職業	フルタイム	59.9	54.8	57.5	57.0
	パートタイム	58.6	53.3	55.1	55.6
	専業主婦	62.0	58.9	59.1	60.7
父親の職業	技能	54.7	51.2	54.3	53.1
	事務・販売	59.4	56.9	59.7	58.6
	専門・管理	63.1	59.9	60.5	61.6
収入階層	500万円未満	54.7	50.3	53.7	52.6
	500万円以上800万円未満	58.2	55.9	57.2	57.0
	800万円以上	63.8	59.4	60.9	62.0
母親の学歴	高卒	54.5	51.7	53.7	52.9
	短大・専門学校卒	60.9	57.2	58.7	59.1
	大卒	67.4	63.1	65.8	65.9
父親の学歴	高卒	53.7	52.0	54.0	53.1
	短大・専門学校卒	58.8	53.0	56.7	56.1
	大卒	64.1	61.0	62.6	62.9

## ■ 4. 地域類型別にみたアンケート結果

### 1) 保護者アンケートから

前節の分析から示唆されるのは、学力の地域格差を考えた場合に、それは「地域による階層差」とそれには還元できない「地域の社会環境の違い」という2つの要因がからまりあって生じているのではないかという事情である。本章を締めくくるに際して、その問題を考えるうえでの1つの手がかりとして、アンケートの結果を利用してみたい。

まず、表1-5は、保護者アンケートの結果である。すべての項目を地域類型とのクロスにかけ、統計的に「1%水準で有意」と判定された項目のみを抜き出してみた。全部で40の項目が上がってきた。表から浮かび上がってくる特徴を、何点かにまとめておこう。

- ①単独の項目として、おそらく最も地域的な違いが顕著だったのが、**[7]**「教育費」の「一人あたり、1か月分の学校外教育への支出」である。「2万円以上」支出しているという割合が、大都市圏で33.1%と他を圧している（市部9.5%、町村部6.2%）。大都市圏の保護者は、圧倒的に「教育熱心」なようである。
- ②それを裏づけるのが、**[4]**「進学期待」である。「大学十大学院まで」勉強してほしいと答えた保護者は大都市圏では67.4%に達している。先にみた、父母の職業や学歴の「偏り」が、こうした結果と密接に結びついていることは言うまでもない。
- ③上の進学期待は、**[5]**「教育観」や**[11]**「自分自身にとっての重要度」と強く関連しているようである。すなわち、大都市圏の保護者は、「将来を考えると、習い事や塾に

通わせないと心配」「できるだけ高い学歴を身につけさせたい」「よい教育を受けることが重要」などと考える傾向が強い。逆に、町村部および市部の保護者は、「学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない」「勉強のことは、子どもの自主性にまかしている」「親や親戚の近くで暮らすことが重要」「仕事で人に尊敬されることが重要」などと考えることが多いようである。

- ④上に述べたような考え方の違いは、**[2]**「子どもとの接し方」や**[13]**「日常生活」に見られるような行動面での違いにもつながっている。例えば、大都市圏の保護者は、「子どもの勉強をみて教えている」「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」「本をよく読む」「美術館や美術の展覧会へよく行く」などと回答する傾向が強い。
- ⑤ただし気になるのは、必ずしも彼らと子どもたちとのつながりが密接なものとは言えないと解釈できる結果が出ていることである。例えば、**[3]**「過去1年の子どもとの活動」にあるように、「学校の課題や自由研究」あるいは「買い物」を「ひんぱんにした」と答えた保護者は、大都市圏が最も少ない。

大都市圏の保護者は、競争的なサラリーマン社会に生きているのであろう。「よりよい教育」「より高い学歴」への渴望は、他地域と比べると圧倒的に高いようである。そのことが「教育熱心さ」を生んでいるわけではあるが、生活のゆとりやその他の大事なものの目配りがおろそかになる危険性があることも否めない。本調査から浮かび上がってきたのは、そうした大都市圏における学歴偏重の心象風景である。

表 1-5 保護者アンケート(地域類型別)(1%水準で有意差のあった項目)

		質問項目		(%)			
		サンプル数(人)		全体	大都市圏	市部	町村部
				2,533	906	890	737
[2]	子どもとの接し方	小さいころ、絵本の読み聞かせをした	とてもあてはまる	26.0	31.7	23.4	22.3
		博物館や美術館に連れて行く	とても+まああてはまる	29.0	33.3	27.2	26.0
		子どもの勉強をみて教えている	とても+まああてはまる	58.6	65.5	55.7	53.5
		本(マンガや雑誌を除く)がたくさんある	とても+まああてはまる	59.6	66.6	59.0	51.6
		テレビゲームで遊ぶ時間は限定している	とてもあてはまる	21.5	28.5	18.3	16.8
[3]	過去1年の子どもとの活動	学校の課題や自由研究	ひんぱんにした	26.7	22.6	30.6	27.1
		学校外のコンサート・劇・映画	ひんぱんに+ときどきした	55.7	63.2	50.9	52.5
		買い物	ひんぱんにした	41.8	36.4	44.4	45.3
[4]	進学期待	どのくらいまで勉強して欲しいと思っていますか	大学+大学院まで	55.7	67.4	51.7	46.1
[5]	教育観	学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	とても+まあそう思う	51.0	46.7	53.6	53.1
		将来を考えると、習い事や塾に通わせないと心配	とても+まあそう思う	55.1	64.1	53.4	46.1
		勉強のことは、子どもの自主性にまかせている	とても+まあそう思う	64.7	60.2	66.8	68.0
		できるだけ高い学歴を身につけさせたい	とても+まあそう思う	60.1	65.7	58.1	55.6
		英語や外国の文化にふれるよう意識している	とても+まあそう思う	49.3	54.2	48.8	43.8
[6]	学校への期待	国・算などの教科指導に力を入れてほしい	とてもそう思う	31.0	36.9	27.5	27.8
		スポーツの能力や体力を向上させてほしい	とてもそう思う	15.8	19.3	14.7	12.6
		国・算などの教科指導は任せておけない	とても+まあそう思う	17.0	28.7	11.9	8.8
[7]	教育費	一人あたり、1か月分の学校外教育への支出	2万円以上	17.1	33.1	9.5	6.2
		教育への支出は、家計にとって負担ですか	とても+やや負担に感じる	35.3	43.7	32.2	28.5
[8]	子育ての支援	身近に子どもを預かってくれる人がいる	はい	72.9	68.1	75.3	76.0
		他の家の子どもを預かることがある	はい	36.4	42.7	32.4	33.5
[10]	社会像	学歴がものをいう社会になる	とても+まあそう思う	58.2	53.3	62.7	58.9
[11]	自分自身にとっての重要度	親や親戚の近くで暮らすこと	とても重要	14.4	11.1	15.2	17.4
		仕事で人に尊敬されること	とても重要	29.0	25.8	29.0	33.0
		よい教育を受けること	とても重要	40.3	44.8	37.2	38.4
[12]	ふだん、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいること	PTA活動		39.4	43.8	42.1	30.7
		自治会などの地域活動		38.7	31.9	42.2	42.9
[13]	日常生活	本(雑誌や漫画を除く)を読む	よく+時々する	63.4	71.0	58.4	59.8
		携帯電話でゲームをする	よく+時々する	8.5	8.5	7.7	9.4
		スポーツ新聞や女性週刊誌を読む	よく+時々する	24.3	17.3	27.3	29.2
		クラシック音楽のコンサートへ行く	よく+時々する	11.9	15.1	11.2	8.9
		美術館や美術の展覧会へ行く	よく+時々する	22.9	28.3	19.0	21.2
		政治経済や社会問題に関する情報をインターネットでチェックする	よく+時々する	27.6	33.3	26.7	22.2
		パソコンでメールをする	よく+時々する	29.6	37.2	26.4	23.8
[14]	家庭にあるもの	持ち家		77.6	69.5	79.7	85.1
		食器洗い機		28.9	36.8	25.8	22.9
		衛星放送・ケーブルテレビ		59.5	54.2	61.8	63.2
		パソコン・ワープロ		85.3	89.6	83.0	82.6
		高速インターネット回線		50.5	62.0	46.1	41.7
		株券や債券		16.1	19.4	15.3	13.2

## 2) 児童アンケートから

最後の表1-6は、子どもたちに対するアンケートの結果を、先の保護者に対するものと同じ形式で整理してみたものである。こちらのほうは、全体で42の項目が統計的に有意差があるものとして残った。全体から見えてくる特徴をまとめておこう。

- ①まず、全体として印象深いのは、**9**「家庭背景」や**10**「家の人との関係」、あるいは**14**「授業の形態」といった、子どもを取り巻く環境的要因（家庭・学校）にかかわる項目が多く残り、**18**「自己観」、**19**「勉強観」、**20**「社会観」といった意識を問う項目はほとんど残らなかったという事実である。地域類型別にみると、環境的要因についての違いが浮上するが、意識項目についての差異はほとんど見られないというコントラストは興味深い。
- ②単独の項目で最も目をひくのは、**3**の中学受験を想定した「学習塾」である。市部・町村部ではいずれも2%台にとどまっているが、大都市圏では20%に達している。圧倒的な違いである。**15**「中学受験」、**16**「進学希望」についての数値の出方も、それと強く連動している。
- ③大都市圏の子どもは、**5**「家庭学習」において、「わからない言葉が出てきたときは辞書をよく使う」「(宿題以外の)プリントや問題集をよくする」と答えているのに、**2**で「ほとんど毎日」家庭学習をすると答えた子どもの比率が低いのは興味深いところである。メリハリをつけて勉強している、ということだろうか。
- ④**4**「平日の生活時間」については、彼らは家庭学習の時間が長く、テレビを見る時間は短い（塾で忙しい?）という結果となっている。なお、「パソコン」と「携帯電話」についての数値には注意が必要である。この数値はそれらを「持っている」と答えた

子どもの回答のみを集計している。したがって、「持っている」者の中での地域差は見られないが、「持っている」者自体の比率は**11**にあるように大きく異なるので、やはり全体をトータルすると、大都市圏の子どもはパソコンや携帯電話に包囲された生活を送っていると見てよいと思われる。

- ⑤**10**「家の人との関係」の回答パターンがおもしろい。すなわち、大都市圏の子どもたちは「親に勉強を教えてください」ことは多いが、「反抗する」(!)ことも同様に多いようである。他方で、「親子でいっしょに遊びに行く」「家族でいっしょに食事をする」「学校や地域の行事に家の人は参加する」割合は町村部等より低い。これは、先ほどの保護者アンケートの結果と符合するものである。大都市圏の親たちは、より忙しい生活を送っているようである。
- ⑥**14**「授業の形態」では、町村部の学校で、「ドリルや小テスト」「宿題」がたくさん出るのみならず、「自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業」も多くなっている。それに対して、大都市圏の学校の数値はいずれも低くなっている。

①でふれたように、意識項目についてはほとんど有意差のある項目が出てなかったという結果は、大変興味深い。子どもたちを取り巻く社会環境（インターネット、塾……）、家庭の雰囲気（どれだけ学歴を重視するか）、学校の授業等については、かなりの地域差があることがうかがえるが、受け手にあたる子どもたちの側の生活意識は、進学意識を除けばそんなには変わらないようである。

学力の地域格差をもたらしているのは、まず何よりも子どもたちを取り巻く地域の社会環境の違いであり、周囲の大人たちの教育意識とそれにもとづく働きかけのバリエーションであると言ってよいだろう。

### ●参考文献

- 黒田孝郎 1962 「学力の格差と教育的環境」日本教育学会『教育学研究』第29巻、第2号  
耳塚寛明 2007 「小学校学力格差に挑む」日本教育社会学会『教育社会学研究』第80集

表 1-6 児童アンケート(地域類型別)(1%水準で有意差のあった項目)

			(%)				
質問項目			全体	大都市圏	市部	町村部	
サンプル数(人)			2,509	896	884	729	
2	あなたは週に何日くらい家で勉強していますか		ほとんど毎日	55.9	48.4	62.3	57.2
3	学校以外で勉強をしていますか		学習じゅく	9.0	20.3	2.6	2.7
			補習じゅく	8.9	10.5	10.0	5.6
4	平日の生活時間	家で勉強する	(単位:分)	60.1	70.4	54.4	54.0
		テレビを見る	(単位:分)	128.4	117.8	132.8	135.6
		パソコンでインターネットをする	(単位:分)	30.1	26.0	32.5	30.5
		携帯電話で話をしたりメールをしたりする	(単位:分)	22.1	21.0	21.9	24.3
5	家庭学習	わからない言葉が出てきたときは辞書を使う	よくしている	29.0	34.5	26.1	25.8
		(宿題以外の)プリントや問題集で勉強している	よくしている	31.3	35.8	28.1	29.6
6	家庭での文化活動	(マンガ以外の)本を読む	よくする	32.2	35.8	32.6	27.2
		美術館や博物館に行く	まったくしない	37.6	33.4	44.0	35.0
		新聞のニュース欄を読む	よくする	14.4	18.4	12.6	11.8
9	家庭背景	家の人はテレビでニュース番組を見る	あてはまる	82.4	78.7	83.1	86.1
		家の人はスポーツ新聞を読む	あてはまる	26.1	24.1	24.1	30.9
		家には本(マンガや雑誌を除く)がたくさんある	あてはまる	54.2	58.9	52.6	50.2
		家の人はパソコンのインターネットを利用している	あてはまる	59.6	65.8	56.4	55.7
		あなたが見てもいいテレビ番組が決められている	あてはまる	13.7	19.0	11.1	10.4
		テレビゲームをしてもいい時間が決められている	あてはまる	37.9	43.8	36.4	32.5
10	家の人との関係	家の中に大学を卒業した人がいる	あてはまる	45.9	56.4	40.4	39.8
		親に勉強を教えよう	よくある	39.8	45.0	34.3	40.1
		親に反抗する	よくある	16.4	20.8	14.5	13.3
		親子でいっしょに遊びに行く	よくある	41.7	38.6	42.3	44.7
		家族でいっしょに食事をする	よくある	73.9	68.6	74.4	79.7
11	持ちもの	学校や地域の行事に家の人は参加する	よくある	36.6	26.0	39.9	45.7
		パソコン	家にはない	14.5	10.7	16.0	17.4
		携帯電話	自分専用のもの	20.9	32.9	13.9	14.5
		自分の部屋	自分専用のもの	56.6	51.8	57.0	62.0
13	教科観	国語は将来役に立つ	とてもそう思う	52.2	55.8	51.2	48.8
		算数が好きだ	とてもそう思う	38.6	43.3	35.1	37.0
14	授業の形態	(国語)ドリルや小テストをする授業	よくある	42.9	43.1	39.0	47.3
		(国語)宿題が出る授業	よくある	36.4	37.8	31.7	40.3
		(国語)自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業	よくある	56.9	50.9	61.0	59.3
		(算数)ドリルや小テストをする授業	よくある	47.6	48.5	44.6	50.1
		(算数)宿題が出る授業	よくある	44.3	46.9	39.3	47.2
		(算数)自分で考えたり、調べたりする授業	よくある	34.0	29.7	36.1	36.6
15	どこかの中学校を受験しようと思っていますか	(算数)自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業	よくある	53.0	48.0	58.3	52.8
		中学校を受験	16.7	24.9	12.4	11.8	
16	将来、どの学校まで進みたいと思っていますか	大学+大学院まで	36.3	46.9	31.4	29.0	
17	家の人は、どの学校まで進んでほしいと思っていますか	大学+大学院まで	35.6	42.2	34.4	29.2	
18	自己観	私はとても幸せだ	よくあてはまる	43.6	47.7	42.9	39.6
19	勉強観	何のために勉強するのかわからない	とても+まあそう思う	16.4	12.9	17.4	19.3
20	社会観	お金持ちの家に生まれた人ほど、いい学校やいい会社に入れる	まったくそう思わない	33.8	36.9	34.0	29.6